

# 「新しい西部史」と環境史

加藤 鉄 三

はじめに

近年、日本における西洋史学においても徐々に環境史(的な)研究、アメリカの自然保護思想・制度に対する批判的論述、経済発展の裏面としての「環境破壊」への言及などは増えつつある。しかし、過度の単純化や、事実の誤解が未だ多く見られる。

また日本においては、環境史を「進歩」・「発展」の裏面としての環境破壊の研究であると見る向きが一部にあり、それはことの一面しか捉えていない歪んだイメージを生みだしがちだと言える。小稿では先ずアメリカに焦点をあわせ、その研究動向を踏まえつつ基礎的な問題を見直したうえで、最後に日本における捉え方の変化と環境史研究の今後の将来性について触れたい。

史苑(第五九卷一号)

一、アメリカにおける歴史研究と環境破壊・自然保護

研究史に触れる前に、環境史とは何かということが問題になる。完全に統一された見解はおそらく存在しないであろうが、ここでは便宜上「異なった人間集団と「自然」との時と共に進化していく関係の研究」というダンスの「最も広義」の定義を採用する<sup>2)</sup>。

さて、彼の地においては一九七六年にアメリカ環境史学会が設立され、現在に至るまで専門誌も発行されているのだが、研究自体はそれ以前から始まっていた。例外的な先駆的研究者の存在は別として、現在に直接つながるものは、一九五〇年代後半から六〇年代にかけて現れた自然保護政策・思想の研究であり、一九七〇年代前半までは、環境変化の研究よりも政治史・思想史の枠組み内での研究が明らかに優位を占めていた。

一方、七〇年代に入ると先住民と環境破壊に対する無配慮からターナー史学を批判する声が現れる。その旗手であったのが、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のウィルバー・ジェイコブズで、彼がその視点に立った最初の論文を発表した一九七〇年は同校に環境史講座が開設された年でもあった。<sup>4</sup>一九七〇年代後半以降、徐々に状況が変わり始め、R・ホワイト、W・クロノンらによる環境と社会の相互変化に焦点を当てた精緻な研究や、より時代と実地の文脈に即した自然保護関係の研究が行われるようになり、近年では複数の人間集団間の社会関係にもかなりの注意を払った研究が公刊されている。<sup>5</sup>

環境史研究はアメリカ西部の専売特許ではないが、アメリカにおいては環境史家が「新しい西部史」の研究者を兼ねている場合も多いことから、次節では「新しい西部史」について検討する。

## 二、「新しい西部史」の意味するもの

この学派は、その呼称が与えられる以前に進行していた（が断片的であった）非ターナー的な研究を、パトリシア・リメリックが『征服の遺産』（一九八七年）において総合したことに負うところが大きい。当然、個々の論者により西部

の定義などについて力点の違いはあるものの、今や無視し得ない重要な一学派を形成している。

それでは、そこで語られるアメリカ西部とはどのようなものであり、ターナー学派の西部史との関係はどのようなものだろうか。

ターナーにとつての西部とはフロンティアのある地域であった。一方、リメリックは場所としての西部（主として乾燥地帯）を設定したうえで、単純な二項対立図式に還元することのできない、多様な人間集団による正当性をめぐる闘争の場という側面に焦点を当て、レトリックと行為の相違、眼差しの多方向性など多くの問題を提起した。またリチャード・ホワイトは、その境界をより明確に政治的なものとして捉え、合衆国が獲得したミズーリ川以西の土地であるとし、征服と多様な人間集団の混交の産物と性格づけている。

両者に共通しているのは、その起点がヨーロッパ系の間が北米大陸の様々な地域の征服を試み、後に合衆国「西部」になる領域で様々な人間集団が遭遇し始めた時、より具体的に言うならば、一六世紀におけるスペイン植民地の現在の合衆国南西部への進出まで遡行されることである。その結果、西漸運動以前の自然・社会環境の変化を無視することはできなくなり、ウイルダネスと文明と言う単純な

二項対立の図式は通用しなくなる。これはフロンティアという基準を放棄した結果の産物であり、環境史的視点を重視したときには意図と結果の間の皮肉な帰結が語られることになる。<sup>6</sup>これが野蛮と文明の接点としてのフロンティアを重視し、一九世紀末におけるその消滅、言い換えるなら「文明の勝利」でもって終わるターナー学派との最大の違いである。

西部の帯びてきた男性的イメージを修正する必要性も語られてるが、ここでは環境史の研究を行う際に常に念頭に置いておかねばならない、西部の「自然」に関する基礎認識を見ておこう。<sup>8</sup>

日本においては未だ、開拓以前には「原初的自然状態」であった北アメリカの景観が、現代における急速な開発の結果「人跡未踏の地はもはやほとんど残していない」状態になったという語り<sup>9</sup>が、ターナーに批判的な議論の中にも見られるのだが、原初的というぼかした表現を用いようとも、認識不足を示していることには変わりがない。

「ウィルダネス」を、人間の影響を受けていない環境という意味で用いるならば、西部となった土地は最初の白人が到来するはるか以前にウィルダネスではなくなっていた<sup>10</sup>というホワイトの要約は序の口の認識に過ぎず、先住民人口が急激に減少し火入れが行われなくなった結果、19世紀

中頃までには森林が「原始化」しつつあったという指摘さえあることを念頭に置いておく必要がある。<sup>10</sup>

そして、アングロ・アメリカ系の開拓者が西部へ進出したとき、すでに手つかずでも原初的でもなかったもう一つ大きな理由は、ヨーロッパ伝来の疫病と馬が先住民社会に甚大な影響を及ぼしていたことであつた。これはヨーロッパ系の人間にとつても意図せざる結果であつたものなのだが、定住農耕民の疫病による衰退と相俟つて、馬を獲得し自らの文化を変化させたバイソン・ハンターが、17世紀末以降に大平原で勢力を築き上げたことはその顕著な事例である。

アメリカの先鋭な環境史家が、社会・自然環境の安定性そのものに疑義を呈したうえで、二〇〇年という相対的に「短い」時間で自然と調和的な新しい文化を確立しえたのかを問い直している一方で、今なお日本の「知識人」が「高貴な野蛮人」論の環境破壊などに対する対象物としての再生を「歴史の大きな流れとして見なければならぬ」と述べていることは、彼我の認識の深い溝を示す好例であろう。<sup>11</sup>

上述の諸点から、環境史において「新しい西部史」を充分に取り込んだ研究・記述を行う必要性があるのは明白である。ここまで「新しい西部史」派の利点を書き連ねてきたが、次に日本においては同様に無視されがちな、ターナー

（学派）と環境史・「新しい西部史」の接点を二点指摘しておく。

第一点目はリメリック自身が明言し、岡田泰男氏も指摘している現代の重要な問題から歴史を読み直すという視点であり、第二点目は学際的研究姿勢である。ターナーは当時のアメリカにおいては未だ一般的ではなかった人口統計資料などを駆使する一方で、社会学・経済地理学・人口学といった領域の非伝統的史料の調査を学生に奨励していた。そして、環境史研究が学際的人格を帯びることは誰の目にも明らかである。

この二点は環境史家を悩ませる問題であるので、次節で要点を述べる。

### 三、「方法論的寄生者」の不安

先ずは第二点目について。研究の際の心得としてリチャード・ホワイ特が挙げるもののうち、学際的であるべきこと、政治的・社会的・経済的文脈の十分な調査が不可欠であるといった指摘については、ほとんどの研究者が当然のこととして首肯するところであろう。

しかし、「環境破壊を嘆く前に、歴史家は健康な生態系とは如何なるもので、その衰退を構成するのは何かについて

の何らかの定義を与えねばならない」という指摘や、研究対象の設定上の問題として、政治的な境界線は自然を理解するうえでほとんど無益であり、「自然」の地域区分を認識することが必須であるというような具体的な内実を伴った議論になると、答えるのは遥かに困難になる。

そして、ここにその学際性の不可避の帰結である、現代生態学との関連から生じる問題が姿を現す。我々はともすると「生態系」や「自然のバランス」などの概念を安易に用いながら、ある論者によると、それらの概念についての論争の余地のない定義は生態学内部に存在しないこと、人間の手が一切入っていない場所など皆無に等しいこと、長期に時間軸を設定すると安定性そのものが疑問に付されるようになることから、生態学には「自然」とは何かを決める能力はないということである。それ故にそれらの概念を用いる際には、生態学の来た道について一通りの知識を持つたうえで、自分が何を言おうとしているかを明確に認識している必要がある。

問題は「自然の」出来事自体は善悪を語らず、それら人間が語る際には不可避的に意味を読み込むということにだけあるのではないことがわかる。また、「ビーヴァーなどの毛皮や鹿皮の乱獲によって生態系のバランスが崩され」たといったような記述は、何も言ってないに等しい（無意

味な)ものであることも一目瞭然である。<sup>16)</sup>

加えて、時間的に遡行したとき、当然のこととして先住民が対象に含まれることになり、それがもう一つの大きな問題を提示する。第一の問題は記録の質・量の問題で、時代を遡行する程、相互誤解に基づいた共通基盤としての性格が増大するというところで、第二の問題は彼ら自身の概念(認識)に関するものである。<sup>17)</sup>

以上のことを踏まえてみると、フロレスが論じる特定の「自然な」区分に基づいた場所についての、長期にわたる一連の多様な文化との関連において環境変化を扱う研究や、リメリックが次世紀初頭に向けての課題として挙げる、特定の場所の自然誌上の性格から始まり多重の眼差しと行為を考慮に入れたうえで、バランス・シートを提示する研究といった指針の実践は困難を極めるものになろう。<sup>18)</sup>

ここで、前節の第一点目の問題に話を移そう。この問題についても以下の二点から問題の解決は容易ではない。第一に現在進行形の状況についての一通りではない認識を要求する。そして、第二にその現在を語るイデオロギー自体についての省察を必要とする。一筋縄でできることではないのも事実であるが、この種の手続きは必須のものである。<sup>19)</sup>

と同時に、自然保護の実践そのものが景観を望ましくな

い方向に変容させてきた側面を持つことが論じられていることも、注意を要する。誰のどのような眼差しが、どのような状況において如何なる行為に結びついたのか、それらが時間の中で何を引き起こしたのかを綿密に調査をする必要があるのだ。<sup>20)</sup>

#### 四、日本における紹介と「研究」

それでは、アメリカの環境史研究は日本においてはどのように論じられて(紹介されて)きたのだろうか。

科学史家の中山茂が一九八二年に「環境史の可能性」を発表して先鞭をつけたものの、大きな反響を呼んだ形跡はなく、一九八〇年代末から九〇年代初めに数本の論文や著書が現れるまで停滞気味であった。<sup>21)</sup>一九九〇年代も後半に入ると第三世界からの批判やアメリカ国内の展開、日本における問題との関連で、アメリカの自然保護思想・制度(さらには従来の環境史研究)に対する批判的議論が現れ始めた。

ウイルダネス(原生自然)概念は先住民の存在を無視するものであり、その結果、ウイルダネスを保存するための制度としてのアメリカ型国立公園は先住民の生活権を認めないものになったという議論や、アメリカの自然保護は生

活環境を無視してきたといったような批判はその典型的なものである。

確かに、かつてナツシュがアメリカの世界への貢献として手放して称賛したように国立公園システムを論じることがはもはやできない。しかし基礎的な認識を蔑ろにしたり、「保全」や「保存」、「ウイルダネス」といった概念の超歴史性を前提とした図式を描いたうえで、それを歴史へ濫適用することによる「批判」では意味は皆無に等しい。実際、ジョージ・キャトリンの先住民の生活を内包するものとしてのNation's Park 構想についても、新しい西部史を踏まえたとき別の様相を帯びることになる。

ここに、三年、アメリカ研究者（大学院生を含む）による多文化主義・環境正義・エコフェミニズムといった批判的観点を導入した論文や研究発表もなされているが、不思議なことにそのすべてが大きな見落としは、あまりに単純な事実誤認を犯している。そして、そのほとんどは「新しい西部史」についての認識の欠如に由来するものであり、看過できない問題であることも明らかだ。

あらゆる意味において西部のないアメリカを考えることはできない。にも関わらず、日本においては西部は真剣な研究の対象から外される傾向が強かった。環境史の対象はアメリカ西部だけではないが、問題が鋭く顕在化してきた

場所であると同時に、環境破壊・保護両面において安易な語りが流布されがちな場所でもある。それ故に歴史研究者による十二分に基礎を踏まえた、緻密な研究が必要とされるのだ。

現在の日本の研究状況は約四半世紀前、アメリカの歴史家ローレンス・レイクストローが冷静な判断をできるようになるまでのモラトリアムの設定を提唱した時のそれに似ているように思われる。

その多くの部分は研究が進行していくにつれて徐々に解消されていくのであろうが、この領域における豊かな可能性は常に危険性と表裏一体であることを最後に改めて強調しておきたい。複数の領域にわたって現在の議論を把握する必要があり、二重、三重の意味で時間軸の取り方が見える方のものに影響することから、言葉の端々から認識のレベルと語り手が立っている場自体が透けて見えてしまうと、いうことを忘れてはならないだろう。

- (1) 中山茂「環境史の可能性」『歴史と社会』創刊号(一九八二年)。川北稔「自然環境と歴史学——トータル・ヒストリーを求めて——」『岩波講座 世界歴史 第一巻 世界史へのアプローチ』(岩波書店、一九九八年)、一〇九—一三二頁。アメリカ以外について一例を挙げておく。平田雅博「帝国文化としての狩りマッキング」『自然の帝国』から、「愛媛大学法文学論集 文学科編」第三一号(一九九六年)。
- (2) Dan Flores, "Environmental History: An Art of People and Place," *Magazine of History* 10 (Spring 1996), pp. 3-4.
- (3) Samuel Hays, *Conservation and Gospel of Efficiency: The Progressive Conservation Movement, 1890-1920* (Cambridge, 1959); Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind*, 3d edition (New Haven, 1983 [1st ed.: 1967])
- (4) Wilbur R. Jacobs, "Frontiersmen, Fur-Traders, and Other Varmints: An Ecological Appraisal of the Frontier in American History," *AHA Newsletter* 7 (November 1970); Jacobs, "Great Despotism: Environmental Themes in American History," *Pacific Historical Review* (以下「PHR」) 47 (February 1978); 岡徳文共著「The Fatal Confrontation: Historical Studies of American Indians, Environment, and Historians (Albuquerque, 1996)」(再録) 215-220。
- (5) 一九八〇年代前半までの研究状況をいっしょに次の論文を参照せよ。Richard White, "American Environmental History: The Development of a New Historical Field," *PHR* 54 (August 1985); 代表的な研究書やの冊あげておく。William Cronon, *Changes in the Land: Indians, Colonists, and the Ecology of New England* (New York, 1983) [佐野敏行他訳「変貌する大地——インディアンと植民者の環境史」] 勁草書房(一九九五年); Alfred Runte, *National Parks: The American Experience*, 3d ed. (Lincoln, 1997 [1st ed.: 1979]); Louis S. Warren, *The Hunter's Game: Poachers and Conservationists in Twentieth Century America* (New Haven, 1997).
- (6) Patricia Nelson Limerick, *Legacy of Conquest: The Unbroken Past of the American West* (New York, 1987); Richard White, "It's Your Misfortune and None of My Own": *A New History of the American West* (Norman, 1991), pp. 3-4; White, "Trashing the Trails," Patricia Limerick, Clyde Milner, and C. E. Rankin (ed.), *Trails: Toward a New Western History* (Lawrence, 1991), pp. 26-39.
- (7) アメリカ西部における女性史の研究動向、自然保護と女性の問題などについては以下の論文を参照せよ。Katherine G. Morrissey, "Engendering West," William Cronon et al. (ed.), *Under an Open Sky: Rethinking America's Western Past* (New York, 1993), pp. 132-144. Glenda Riley, "The Historiography of American Indian and Other Western Women," Donald L. Fixico ed., *Rethinking American Indian History* (Albuquerque, 1997), pp. 43-70; G. Riley, "'Wimmin is Everywhere': Con-serv-ing and Feminizing Western Landscapes, 1870-1940," *Western Historical Quarterly* 29 (Spring 1998), pp. 4-23.

- (80) Peter Coats, "Chances with Wolves: Renaturing Western History," *Journal of American Studies* 28 (August 1994), pp. 241-254 が研究動向の紹介として参考になる。
- (9) 能登路雅子「開発の言説とボランティア」アメリカ西部開拓びみろシモンズ」川田順造他編『岩波講座 開発と文化 三 反開発の思想』岩波書店、一九九七年）二一五、二一八頁。
- (10) White, op. cit. p. 4; Shepen J. Pyne, *Fire in America: A Cultural History of Wildland and Rural Fire* (Seattle, 1997 [Princeton, 1982]), pp. 71-122; William M. Denevan, "The Pristine Myth: The Landscape of the Americas in 1492," *Annals of the Association of American Geographers* 82(1992), pp. 369-385.
- (11) Dan Flores, "Bison Ecology and Bison Diplomacy: The Southern Plains from 1800 to 1850," *The Journal of American History* [以下「JAH」略記] 78 (September 1991), pp. 465-85; 杉本淑彦「現代における「高貴な野蠻人」『反開発の思想』一六七〜一八五頁（特に一八四頁）。
- (12) Limerick, op. cit., p. 31; 岡田泰男「ロンゲテイルと開拓者—アメリカ西漸運動の研究』東京大学出版会、一九九四年）三〇八頁。Jacobs, op. cit., pp. 137-174.
- (13) Richard White, "American Environmental History," pp. 334-5; Dan Flores, "Place: An Argument for Bioregional History," *Environmental History Review* 18 (Winter 1994), pp. 1-18.
- (14) Kristine S. Shrader-Frechette, and Earl D. Mckoy, "Natural Landscapes, Natural Communities, and Natural Ecosystems," *Forest & Conservation History* 39 (July 1995), p. 138-142; Donald Worster, "The Ecology of Order and Chaos," *The Wealth of Nature: Environmental History and the Ecological Imagination* (New York, 1994), pp. 156-170 (小倉武一訳「自然の富」食料・農業政策研究センター、一九九七年)。
- 生態学史については、ロバート・P・トッキンソン著「大串隆之他訳『生態学 概念と理論の歴史』思索社、一九九九年）が参考になる。「生態系」内での人間の位置付けについては、武内和彦『地域の生態学』（朝倉書店、一九九一年）が一つの見方を提示してくれる。
- (15) William Cronon, "A Place for History: Nature, History, and Narrative," *JAH* 78 (March 1992), pp. 1347-1376.
- (16) 竹中豊・和田光弘・白井洋子「北米植民地の形成」歴史学研究会編『南北アメリカの五〇〇年 第一巻「他者」との遭遇』（青木書店、一九九二年）一三五〜一七九頁。引用は一六七頁。これ以外にも同様の記述をしているものは多数あるが、紙幅の都合上割愛する。
- (17) Richard White, "Indian Peoples and the Natural World: Asking the Right Questions," *Fixico* (ed.) *Rethinking American Indian History*, pp. 87-100.
- (18) Flores, "Place," p. 12; Patricia Limerick, "Disorientation and Reorientation: The American Landscape Discovered from the West," *JAH* 79 (December 1992).
- (19) ターナー自身「前者についてはかなり注意深く見ていた」とは事実である。例えば、「クラーク大学の創立以来『アメリカ古典文庫—九 フレデリック・J・ターナー』（研究社、



一九七五年)・二二〇～二二三頁。

- (20) 一例として次の論文を挙げよう。Nancy Langston, "Forest Dreams, Forest Nightmares: An Environmental History of a Forest Health Crisis," Char Miller (ed.), *American Forests: Nature, Culture, and Politics* (Lawrence, 1997), pp. 247-271.

- (21) 中山「前掲論文。岡田泰男「ターナーの『ユークリアー』西部開拓と自然保護」『アメリカ研究』二二二号(一九八八年)。岡田「アメリカにおける森林保護前史——ニューイングリランドを中心に——」『三田学芸雑誌』八一巻四号(一九八九年)。岡島成行「アメリカの環境保護運動」『岩波書店』一九九〇年。富所隆治「フロンティア」『環境破壊の原点』『史苑』第四八巻一号(一九八八年)。富所「フロンティア仮説に対する生態学的挑戦の意味」『社会文化史学』第二五号(一九八九年)。(22) 鬼頭秀一「自然保護を問うおす——環境倫理とネットワーク」『筑摩書房』一九九六年)・一〇〇～一五頁。ただし同書は「保全」の実践をめぐる問題を全く扱っていない。第三世界からの批判については、次の論文を参照せよ。Ranachandra Guha "Radical American Environmentalism and Wilderness Preservation: A Third World Critique," *Environmental Ethics*, 11(1989)。アメリカ国内におけるウィルダネス概念の有効性を問う直す議論については次の論文を参照せよ。William Cronon, "The Trouble with Wilderness; or, Getting Back to the Wrong Nature," William Cronon (ed.), *Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature* (New York, 1995)。(23) Roderick Nash, "The American Invention of National

史苑(第五九巻一号)

Parks," *American Quarterly* 22 (Fall 1970).

- (24) ヨセリテ「グレイシャー国立公園からの先住民の排除について」次の日本の論文を参照せよ。

Mark Spence, "Dispossessing the Wilderness: Yosemite Indians and the National Park Ideal, 1864-1930," *PHR* 65(1996), pp. 27-59; Spence, "Crown of the Continent, Backbone of the World: The American Wilderness Ideal and Blackfeet Exclusion," *Environmental History* 1(1996), pp. 29-49; キャトリック・リメリック, *Legacy of Conquest*, pp. 181-188; George Catlin, *North American Indians*, ed. by Peter Mathiessen (New York, 1989 [originally published in 1841]).

- (25) 小堀和人・石山徳子「環境史研究と多文化主義の接点」『アメリカ史研究』第一九号(一九九六年)。能登路「前掲論文。また、一九九七年五月にアメリカ史研究会は「環境史が開く新たな地平」と題された例会を開催しているが、そのでの二本の発表は「主体を取り替えただけの内向的な社会運動研究」という感の強いものであった。

- (26) Lawrence Rakestraw, "Conservation Historiography: An Assessment," *PHR* 41(1972), pp. 271-288.

(立教大学文学研究科史学専攻博士課程前期)